

〈書 評〉

IDA BROMLEY, MBE MCSP 著

荻原新八郎（金沢大学医療技術短期大学部理学療法学科）訳

〈原著第3版〉

四肢麻痺と対麻痺

理学療法士のための手引書

杉元雅晴（藍野医療技術専門学校）

本書は、1982年に「四肢麻痺と対麻痺のリハビリテーション」（原著第2版）として翻訳出版されていました。

その後、第3版が出版された機会にあらたに翻訳され、「四肢麻痺と対麻痺：理学療法士のための手引書」として再出版されました。特に第3版では、呼吸器の理学療法と脊髄不全損傷の項目が改訂、加筆されています。それから、巻末には引用文献および参考文献が掲載され、更に深く学究できるように適切に配慮されています。

本書の構成は、脊髄損傷の臨床像の把握から始まり、急性期および回復期の理学療法を各段階の機能訓練の目的と具体的な方法を中心にまとめられております。さらに、超高位損傷や脊髄不全損傷や小児の脊髄損傷に対する機能訓練の特徴まで言及されています。ま

た、脊髄損傷者がかかえる合併症を紹介し、その予防と治療や指導方法についても書かれています。最後には、スポーツの分野までふれ、動作分析と治療の価値まで考察されています。特に、本書の特色でもあります。機能訓練については、再現性が高められるように、理学療法士と患者にわけ、動作や指導方法について詳細に手順よく書かれています。それゆえ、脊髄損傷者の機能訓練の手引きとしては、非常に的確な教科書と思われる。

残念ながら、物理療法、医学的知識や考察は、概略でおさえられていますので、更に深い知識を必要とする時には、それぞれの項目の専門書に頼らざるを得ません。

さて、私達教員にとって、学生に疾患から患者像を把握させることは、なかなか困難であります。

まして、患者への機能訓練や指導は、さらに難しいことです。まさに、本書は学生が脊髄損傷者の機能訓練や日常生活動作の分析について考え始めた時に会える良き臨床指導書となることでしょう。

ところで、いつも気になることですが、一般に翻訳書は、文章相互の修飾関係が複雑になりがちです。そこで、読者は、読むことに頭を悩ませ、内容を理解するために読み返さなければならないことが度々あります。しかし、本書の訳文は、読みやすく洗練された短かい文章で構成されています。それゆえ、一気に読むことができ、全体を読み終えることに不思議と長い時間を要しません。また読後に疲労感もなく、ただ患者に対して指導してみたいという欲求にかられてきます。それも、訳者の長年の海外での理学療法士としての治療活動と言語的障壁のなさから生まれてくるものと思われます。

最後に、典型的な脊髄損傷患者の機能訓練にとって基本的な要点が書かれているので、臨床場面での活用度も高く、教科書として又入門書として最適であることを信じております。

（B 5，頁 230，図 192，写真 14，1987，¥4,200，〒 300，医学書院刊）